

推薦のことは

このたび新しい胆膵内視鏡の本が出版されることになった。大変喜ばしいことである。特に本書はERCP関連手技のみならず超音波内視鏡の描出の基本から穿刺法まで書かれており、この領域に携わる、初学者、若手医師を中心とする多くの臨床家、研究者が待ち望んでいた本である。

MRCPが臨床応用されて、胆膵疾患の診断体系は大きく様変わりした。それ以前は、血液検査、体外からの超音波検査に引き続き、早い段階で診断的なERCP検査を行うことが推奨されていた。MRCPがそれにとって替わり、内視鏡検査としては、超音波内視鏡が確定診断としてより重要となり、その位置づけも変化し、用いられる頻度も多くなってきた。

胆道系、膵臓の疾患に対する超音波内視鏡は、胃十二指腸のガスによる死角がないことや、高い周波数の超音波を使うことによる空間分解能の向上など、体表からの超音波断層法に比べてより多くの情報が得られ、診断レベルとしては高い位置にあった。しかし内視鏡操作のための熟練が必要であることや、麻酔が必要であるなど侵襲性が高いことなど、技術依存度の高い検査法である。

マイクロコンベックス型の超音波プローブを装着した超音波内視鏡をガイドに使って、内視鏡針による生検が行えることになって、さらにこの領域の診断は飛躍的な向上を見ることがになる。特に膵臓においては、従来手術による切除標本を除いては、組織診断ができない臓器であった。いうまでもなく、組織診断が得られるということは、特に腫瘍性疾患においてはきわめて重要な意味をもつ。すなわち病理診断は、化学療法や放射線療法、あるいは手術による切除術などの治療法を決定する、最終的な根拠となる。

内視鏡を操り、内視鏡診断を行い、超音波断層像を読み、超音波画像をガイドに穿刺生検する、といった一連の手技と画像診断能は、当然のことながら高度な熟練を要する。また、合併症の頻度を抑さえ安全に検査を行うためには、技術的な教育が欠かせない。

以上のような現在の胆膵領域の超音波内視鏡診断の位置づけから、ERCPと超音波内視鏡手技の解説が併せて盛り込まれた本書が出版されることの意義は大きい。この領域の初学者、若手医師、さらには専門家も本書から多くのことを学ぶことができ、今後の日本における胆膵領域の診療レベルを高めることに寄与することは間違いのないことと確信するものである。

2008年9月

東京医科大学消化器内科 教授
森安史典